現代中国社会に於ける末端組織

蘇　徳昌*

Smallest Unit of the Society in Modern China

Dechang Su

要旨

現代中国社会は組織化された社会であり、国民はいずれかの末端組織に所属している。中央・地方組織から末端組織に至るまでの組織には核があり、それが中国共産党の各組織である。

核は国民を政治的・思想的・組織的に管理し、国民に思想改造を実施することによって末端組織の結束・強化を図って来た。

末端組織は閉塞性・精神性・拘束性・消極性・脆弱性という特徴を具え持っている。

毛　沢東時代の前期にはこの組織は機能したが、後期には弱化し、ポスト毛　沢東時代に入ってからは崩壊しつつある。

中国共産党は社会主義体制の枠内で、末端組織の建て直しに必死になっているが、徹底した再構築を迫る国民をどう誘導するかが問題である。

Ⅰ．はじめに

ソ連・東欧諸国の社会主義体制の終焉に伴い、世界に於ける冷戦構造が崩壊し、新秩序が構築されつつある現在、中国共産党は中国は社会主義の最後の砦であると自負すると同時に、或いは恐怖感を感じてか、益々「社会主義体制・プロレタリア階級独裁・共産党指導・マルクス・レーニン主義・毛　沢東思想」を堅く守ろうという所謂「四つの堅持」を強化する一方、社会主義の最終的勝利を勝ち取るために、その手段として、「社会主義市場経済」移行を決め、「開放・改革」なる政策を実行に移している。

各国の世論は、社会主義は失敗に終わり、自由主義は最早世界の趨勢・歴史の流れと見つつも、一つは独立国家共同体を始め旧社会主義国の自由経済への移行がなかなか進捗しないばかりか、権力闘争・民族・宗教紛争が根を絶たず、悪化の一途を辿っている。一つは中国が種々様々な問題を抱えながらも、その経済は高度成長の兆しさえ呈している位順調に進んでいるのを目の当たりにし、今後中国はどこへどう進むのか、大混乱状態にならないで済むのかと一抹の不安を抱き、注意深く中国を見守っている。先進諸国は、程度の差こそあれ、経済的には援助を行い、中国を孤立させず、世界に取り込もうとしている。但し、軍事的には警戒し、牽制しているし、更に、人権問題を取り上げ、中国の政治の民主化・文化の多様化を促そうとしている。

平成5年6月14日受理　*教養部

中国は大国である。地球上に住んでいる５人に一人は中国人である。中国の動向は世界の行く末を左右する。況して中国の国民にとっては国の進路は命に関わる死活の問題であり、関心を持たないはずがない。筆者も一介の中国人として、身を今現在海外に置きながら、日夜中国の成り行きを見つめている。そして、中国という社会に起こっている一見社会主義か自由主義か判明出来ない、或いはその両者が混在している諸現象を理解しようとしている。残念ながら筆者の専門は政治学でも社会学でもないし、中国共産党の党員でも反体制派でもないので、学問的に理論的に解明することは出来ない。然し、筆者は中国共産党が大陸で政権の座に就く直前からつい最近まで45年間、上海や北京で暮らして来たし、現に家族も大半中国に住んでいる。それに、幸か不幸か、中国大陸は組織化された社会であるので、一大学にいても居ながらにして或る程度社会の全貌が分かる。それで、焦点を中国社会の末端組織に当て、この論文ならぬ体験談を綴ってみる気になった次第である。

ここで言う末端組織とは中国語で言う「基層単位」のことである。大陸にある中国という国全体のような大集団では勿論なく、一つ一つの家庭・所帯みないな一番小さな集団でもない。その中間にあり、労働や学習を共にする共同体で、なお且つ社会的に独立した行動を取りうる最小の集団を指す。

Ⅱ．全社会の組織化

１．全民組織化

大陸に住むいかなる人種・民族であろうと、その年齢・性別を問わず、凡そ中国国民である限り、必ず何等かの組織に属しているか、或いは組み込まれている。農業・漁業・牧畜業を営む人は村という組織に、都市部の人はその就職先である企業・学校・機関・部隊等に。中国は全部男女共働きなので、夫婦別々にそれぞれの組織に属しているのがほとんどである。大学生は大学に属しているが、高校生以下は日本の町内会に相当する「街道」に属し、定年退職者及び「待業青年」と言われる若手失業者・浪人もこの「街道」に組み込まれている。

この何等かの組織に属するという言葉の意味は、人間として認められ、生きて行け、労働・学習等の社会的行動がはじめて出来るということであると同時に、その組織の一員として組織から束縛され、管理されるということである。その意味では、強制的と言えば強制的であり、義務と言えば義務である。

このような村・企業・学校・機関・部隊・街道等が所謂末端組織である。

長期で出国する者は中国大陸から離れると同時に戸籍から除籍されてしまうし、帰国すると同時に又戸籍が戻されるようになっている。但し、公務出国者は海外滞在中でもその組織のメンバーであることに違いなく、在外公館が「身柄を引き受け」、組織に代わって管理する。現状は在外公館は人手が少なく、経費も足りないので、手が届かず、言わば野放しの状態である。

２．上部組織

村の上部組織として郷があり、城下町みたいな鎮と郷を統合して県、県の上には市、そして、省がある。省にによっては、市との間に「地区」という組織がある場合もある。北京・上海・天津の三つの中央直轄市は下に県と区があり、その区の下に街道がある。漢民族以外の所謂少数民族が集中している所には旗・自治旗・自治県・盟・自治州があり、省に相当するのが自治区である。例えば、チベット自治区・内蒙古自治区・広西壮族自治区がそうである。

企業・学校・機関・部隊はそれがどの行政機関の管轄になるかによって上部組織が決まるのは当然のことであるが、それと並行して業種別の上部組織があり、二つになる。例えば、北京にある国立大学の上部組織は北京市と国家教育委員会である。上海に駐在する部隊は上海市と

南京軍区である。

一番上にあるのが中央組織である。

上部組織は組織として下部組織を統合し、管理するが、上部組織で働いている者はそれから成る上部組織直属機関に属し、それが又末端組織になる訳である。例えば、市長は市の長として市の管理の仕事をするが、個人としては市直属機関に属し、そこの管理を受ける。要するに何人と言えども、必ず何等かの末端組織に組み込まれている訳である。

3．核

末端組織及びその上部組織には必ず核があり、それが中国共産党の組織である。そこが中国と日本とかの先進諸国との根本的に違う所である。

中国共産党には現在約5千万人の党員がおり、子どもを含めた24人に一人が共産党員となる割合である。中国共産党には中央組織・地方組織、そして末端組織がある。党の委員会・総支部・支部・小組がそれである。特別の場合は、党組という組織を作ることもある。

中国には共産党の他に中国民主同盟・中国農工民主党・中国致公党・中国国民党革命委員会・九三学社・中国民主建国会・中国民主促進会・台湾民主自治同盟という所謂民主諸党派があるが、その党員・盟員・会員はいずれかの共産党の末端組織か国民の末端組織に所属している。その外に、政党でこそないが、色々な場で一つのグループとして行動する「無所属」、無党派民主人士がいる。それは当然何等かの末端組織に所属している。

企業・学校・機関は上部組織が二つになると述べたが、業種別の上部組織の核との繋がりはほとんどなく、核としては所在地の上部組織の核と繋がる。例えば北京にある国立大学は中国共産党北京市委員会と繋がり、国家教育委員会の共産党党組とは関係しない。

軍は共産党の絶対的な指揮下に置かれ、軍内に民主諸党派の存在は許されない。省・中央直轄市・自治区の共産党委員会の責任者である書記はそこに駐在する部隊の政治委員を兼任し、当該部隊共産党組織の最高責任者になる。

中国大陸全土を人間の身体に例えるならば、中国共産党中央委員会は心臓であり、その地方組織から末端組織に至るまでの各組織は血管のように体の末梢まで分布しているのである。そして、国民の各組織は体の各器官であり、肉である。

4．核の機能

共産党の各機能はそれが存在する、同レベルの国民の各組織に対し、指導・監督・保証の立場にある。これが核の役割である。ということは、中国共産党は中国大陸全土にあるすべての組織、そして、それに所属している国民全体を指導・監督・保証しているということになる訳である。ここで言う保証とは、当該組織がその種々の計画や目的を達成するのを核が保証するという意味である。

共産党の仕事・活動としてそれは色々あるが、主に路線・政策・方針及び重要な人事の決定である。勿論、共産党に限らず、国全体、中央から地方・末端に至るまでのすべてを含めてである。例えば、国で言えば、この文章のⅠの冒頭で述べた四つの堅持・社会主義市場経済への移行・開放・改革の路線・方針・政策がそうであるし、又国家主席・国務院総理・全国人民代表大会常務委員会委員長・中国人民政治協商会議全国委員会主席・最高人民法院院長・最高人民検察院総検察長を始め国家指導者等の幹部も実質的に共産党が決める。実質的にというのは、共産党は一応は提案するだけで、最終決定はそれぞれの会議に於いて下すが、通らないということは先ず有りえないからである。軍の場合は、共産党の中央軍事委員会がいっそのこと国家中央軍事委員会と一緒になっており、全軍を率いている。

共産党の組織原則は民主集中制である。個人はグループに従い、少数意見派は多数意見派に

従い、下部組織は上部組織に従い、地方は中央に従うという所謂四つの従うである。つまり結局は中国国民全体が中国共産党中央委員会に従わなければならないということである。中央委員会閉会中は政治局とその常務委員会が職権を行使するが、常務委員の人数は5から7名位である。現在、その常務委員の上位4名が国家主席・総理・全国人民代表大会常務委員会委員長・中国人民政治協商会議全国委員会主席を兼任している。残りの3名のうちの1名が筆頭の副総理、1名が副総理、1名が中央軍事委員会副主席である。非常に徹底した中央集権である。

共産党は国の内政・外交等の重要事項に関し、党内・国民向けに「中国共産党中央委員会文件」という通達を出すが、これには法令以上の威力があり、党員・国民は絶対的に遵守しないといけないし、反対は勿論のこと、論評も許されない。ところが、その「文件」もランク付けしてあり、県・師団以上の幹部までとか、党内だけとか、国民の大多数である人民までいいとか、色々ある。そして、人民向けの場合は末端組織の核の責任者がそれを読み上げるのを人民は只聞かされるだけであり、手にして読んだり、ましてや研究することは出来ない。遵守する義務はあるが、復習し、覚える権利さえ人民にはない。核或いはその責任者に任せる、と言うより共産党或いはその幹部の言いなりにならざるを得ないのである。法治国家になるにはまだまだ程遠い。

5．情報・マスコミ

古今東西如何なる政権であろうと、それを維持し、その支配を実行する場合、一つは法とか警察・軍とかの強硬的な手段を使い、一つは思想・言論の掌握とか宣伝・世論作りとかの柔軟的な方法を利用する。共産党も例外ではない。それどころか、中国共産党は中国の天下は鉄砲によって勝ち取ったものであると明言しているし、終始マルクス・レーニン主義・毛　沢東思想で全党員及び全人民の思想教育と意志の統一を計って来ている。

中国共産党の中央・地方・末端の各組織には必ず組織・人事担当の幹部の他に宣伝・教育担当の幹部がいる。支部・総支部には宣伝委員がおり、委員会には宣伝部というセクション或いは機関が設けられている。この宣伝部というのは広報とかのような生易しいことをやっているのではない。社会主義体制下に於ける政治思想の掌握・言論・情報の検閲という実に生殺与奪の絶大なる権限を握っているのである。

欧米・日本のマスコミは情報公開の社会にあり、言論が自由であるので、情報伝達の機能の他に、監督・抑制の機能があり、政治・経済・社会・文化に対し、相当大きな影響を与えることが出来る。中国大陸の場合、新聞・雑誌・図書・テレビ・ラジオ等マスコミは中国共産党の宣伝手段・道具であり、それで以て共産党員乃至人民の思想・意志の統一を計る。即ち権力の非常に重要な一部分である。国民を誘導する力はそれ故欧米・日本のマスコミよりも桁違う程強い。社会の行く末・歴史の流れを左右することが出来る。

共産党は中央から地方まで全部機関紙・機関誌をもっている。と言うよりも、主な新聞や雑誌は皆共産党の機関紙・機関誌と言った方が正しい。その他のものでも、何しろ出版社・編集部・印刷工場・テレビ局・放送局等所謂国民の組織でもその中には核があり、共産党の指導・監督・保証下にある。日本の「民放」のようなものは一つも存在しないし、有り得ない。

宣伝部が報道の方針を決め、検閲を行う。中国共産党中央委員会の機関紙である「人民日報」の重要な社説・論説は昔よく毛　沢東自身が執筆したし、大事な文章にも朱筆を入れた。政治・軍事・外交に口を出すことは勿論、報道していいかどうか、どう報道すべきかさえ、皆宣伝部からの宣伝方針或いは許可を得なければならない。この宣伝方針のことを中国では「宣伝口径」と言う。所謂「純客観的」な報道など有り得ない、どんな報道でもそれを報道する者の主観が入る、という考え方なのである。天安門広場事件の時、中央テレビ局の或る有名なア

ナウンサーが学生に同情し、せめてこれだけでもと思ってか、黒い喪服を着て放送したので、そのポストから外された。ソ連の所謂8月革命の時、中国はクーデターには賛成の立場、それでマスコミの報道は異常に早かったし、詳しかった。ところが、進展があまりに速く、中央委員会宣伝部の「宣伝口径」が届いた時には事態が反転していたので、どう報道したらいいか戸惑ったそうである。上海の雑誌「世界経済導報」は共産党の機関誌ではないが、政治の民主化・市場経済への移行を鼓吹し、発行禁止と共産党上海市委員会から命令され、最後は廃刊になり、編集長は停職反省の処分を受けた。

海外からの活字・音声・映像による情報の検閲は非常に厳しい。新聞・雑誌・図書その他刊行物・録音・録画テープは全部検査を受けなければならないし、一昔前までは電波の妨害もやっていた。宇宙アンテナは勿論のこと、ファクシミリも個人で持つことは許されない。

宣伝部は人文科学・社会科学の研究・教育にも口を出す。大学のそういう学部・学科のカリキュラムの設置乃至講義内容までチェックする。外国の社会科学専門の学者と大学生の接触はなかなか出来ないし、中国の学者が国際シンポジウムで中国政府の公式見解しか言わないのは皆それが原因しているからである。

特にマルクス・レーニン主義・毛　沢東思想に対する解釈・評価或いは修正・発展は中国共産党中央委員会及び政治局が独占し、最高責任者の金科玉条を待つしかない。他の幹部・学者は、宣伝部と言えども、只それを理解し、噛み砕いて宣伝するだけである。

以上で中国社会に於ける末端組織の位置付け・環境を一応述べたつもりであるが、この組織化について、中国近代化の先駆者孫　文はかって中国は皿に盛った砂のようだと言ったことがある。そして、毛　沢東は、中国共産党の御蔭で、中国人は組織され、団結するようになった、と自負したことがあるということだけを付け加えておく。

Ⅲ．人間管理

1．人間の分類

中国の国籍を持っているのが中国国民であることは言うまでもないが、その内、労働者階級・農民階級・小資産階級・民族資産階級に属する国民及びその他の愛国者を人民と言う。ここで言う愛国とは社会主義体制の国を愛するということである。国民でありながら人民でないのは官僚買弁資産階級・地主階級に属する者で、人民の階級敵になる。人民には民主を施すが、階級敵には独裁を行う。言論・行動の自由は与えられない。

中国語の「群衆」には色々な意味があるが、共産党員でない人民をも群衆と言う。共産党は階級分析の方法で群衆を分類する。

労働者、その中でも特に産業労働者、「貧農・下層中農」という所謂貧しい農民、それが第1類。

中農、小資産階級即ちプチブルジョア、それが第2類。インテリは大半これに属する。

民族資本家、即ち国民党政権時代、官僚資本、外国資本でない土着の資本を所有し、労働者を雇って、事業を行い利潤を得る者、または出資者。労働者を搾取するので、搾取階級になる。それが第3類。

以上に属していても外国や台湾・香港・マカオに長年住み、帰国した所謂華僑及びその他の愛国者、特に国に対する貢献が大きく、知名度も高くて、影響力がある人士、それが第4類。

労働者階級と民族資産階級の間の矛盾・対立は人民内部の矛盾・対立であるが、矛盾・対立があれば、闘争が起こる。この両者間の階級的矛盾・対立と階級闘争が社会主義体制下の中国の主な矛盾・対立・闘争であると中国共産党は見、毛　沢東時代はそれを共産党活動の中心に

据え、闘争を繰り返して来た。ポスト毛　沢東の時代になってから、中心を経済・国の建設に変えたが、この階級闘争がもう存在しないということではない。事ある毎にそれを取り上げる。

末端組織の核はその核の周りにいる群衆を以上の方法で分類すると同時に、主に社会主義体制・共産党に対する立場・態度、その言論と行動により常に左・中間・右の3種類に分類している。左を進歩・先進・積極分子、右を落伍している落伍分子、その両者の間にいる者を中間分子という。

階級的な所属、つまり家柄・素性は不変のものであるが、分子は可変である。例えば、第3類に属していても、所属の階級に背き、労働者階級の立場に立ち、社会主義体制・共産党を断固として支持・擁護するという品行であれば進歩・先進・積極分子になれる。

共産党員は分担してその周りにいる群衆と付き合ったり、友達になったりして、その人が今何を考え、何をやっているか、常に現状・動向を把握し、それに分析を加え、群衆の分子分類をしている。「ちょっと話しがある」と核の幹部・党員から言われたら、断われないし、又断わらない。断わって憎まれでもしたらそれこそ大変である。誰だって落伍分子になり、酷い目に合うのは嫌である。群衆の側から言えば、自分の考えていることや、やっていること、悩み等何から何まで進んで幹部・党員に話し、身の上相談に乗ってもらう人もいれば、自分のことではなく、人のことを告げ口する人もいる。かと言って、呼ばれない限り自分からは進んで話そうとしない人もいる。それはそれで又共産党に対する態度として評価される。彼女は党を信頼し、党と心を合わせている、あいつは党から離れ、党に不満或いは反対しようとしているというふうにである。

若者が多く、共産党員だけではカバー出来ない所は中国共産主義青年団という共産党の助手の役割を果たす青年の組織があり、それが協力する。

人民の階級敵と言えば、地主・富農・反革命分子・「壊分子」と言われる不良分子・右派分子がそれである。それを纏めて「五類分子」と言う。右派分子は政策では人民内部に属するが、実際の扱い方は階級敵と同じである。人民内部の左・中間・右の分子はあくまでも核内で掌握し、表向きにはしないが、この「五類分子」はレッテルを貼られた公式の身分である。日本の戦前・戦時中で言う非国民かそれ以上の囚人みたいな人種である。核は群衆と一緒になってその者たちの言論・行動を監視し、正道に立ち返るよう強制的な人間改造を監督し、独裁を実行する。それを「群衆監督・群衆専政」と言う。レッテルを剝がしてもらわない限り、「五類分子」及びその家族は一生日の目を見ることは出来ない。「五類分子」にとってはその意味で末端組織は青空刑務所と言えなくもない。

2．人間評価の基準

中国語では家柄・素性のことを「成分」と言い、品行・行為のことを「表現」と言う。　中国共産党は終始人間を評価する時は「唯成分論ではなく、表現が重要である」と言っているが、毛　沢東時代は実際成分の方を重く見、成分重視・表現軽視であった。現在でも中央から地方・末端組織のリーダーは共産党員である。総理・副総理・中央政府各委員会委員長・部長・省長・自治区主席・市長・県長・区長・大使・参事官・軍の上部から下部の全ての長・ほとんどの大学長・研究所長は全部共産党員である。共産党は労働者階級の先鋭隊であるから、勿論第1類である。進学するにも重点的な大学の重点的な学部・学科には成分に対する要求が設けられており、誰でも応募出来る訳ではない。筆者は高校卒業後、北京大学の原子力学科を志望しようとしたが、残念ながら第1類ではないので諦めるしかなかった。ところが、同級生の某女の子なんかは数学・物理学が大嫌いで、小学校の教諭になりたくて教育大学を希望していたが、第1類に属するが故、無理やり無試験で北京大学の当該学科に入学させられた。就職の場合は

専門・専攻および在学中の成績は二の次で、先ず成分を考慮に入れた。先端技術・外交・公安・軍事関係は成分で青田買いした。外国人との接触にまで成分は影響した。筆者が在籍していた学部に日本人の教官がいたが、自由には会えず、その研究室にも入れなかった。一度どうしてもという用事が出来たので、会いに行ったが、事前に要件を核に願い出、許可をもらい、事後には詳しく話の内容を報告した。いつか許可の手続きを取り、日本国上海駐在総領事館に行ったことがある。帰りに首席領事に急に呼ばれ、核に報告し許可を取る訳にも行かず仕方なく一緒に行った仲間から離れ、一人残ったが、日を改めて一緒に食事でもという話しであり、15分後総領事館の車で帰宅した。そうしたら翌日大学共産党委員会責任者たる副書記兼副学長から呼び出され、物凄いお叱りを受け、厳重に注意された。「徳昌同志よ、我々共産党組織はこのように君を信頼して来たのに、それに背くような、実に危険な行為を取るとは」、と。11年前のことであるが、いまだにその声は耳のそばで響いている。

ポスト毛　沢東時代になってから、共産党は軌道修正をし、その仕事・活動の中心を経済・国の建設に変更したので、人間評価の基準も徐々にではあるが、少しずつ変わって来た。学者・科学者・技術者等、要するにインテリが必要になって来た訳で、成分ばかりに拘ると経済・建設にとって欠かせない人材が集まらなくなる。成分を重要視するのに変わりはないが、表現も相当見るようになって来た。そして、本当に学問・技術・経営・管理の実力のある者の場合はその表現も大目に見る。これは大変な変化である。

それよりももっと大事なことは中国語で言う「知識分子」即ちインテリは労働者階級に属するとしたことである。知識分子は肉体労働ではないが、頭脳労働に従事している、頭脳労働も同じく労働である。科学・技術は生産力であるどころか、非常に重要な生産力である。然るに、知識分子は立派な労働者階級の重要な一部分である。勿論例によってこれは最高責任者の金科玉条・指示によってである。ここで一言付け加えるが、それまで大半のインテリは第２類に属するものの、その世界観はブルジョアのものであるというので、「知識分子」という名前の前には「資産階級」という連体修飾語が付き、「資産階級知識分子」となっており、労働者階級と資産階級との階級闘争の中では資産階級の側に立たされていた。ところがこの成分変更により、それが「労働者階級知識分子」になったのである。

表現とは品行・行為のことを言うが、主に社会主義体制・共産党に対する階級的立場・態度を指す。具体的にはその時の中国共産党指導部の路線・政策・方針に対し、どういう立場に立ち、どのような態度を取るかを見る訳である。ところがそれが時代・時期によって変わるのである。それで自ずと表現の基準も変わる。毛　沢東時代の後期・プロレタリア文化大革命の時期は資本主義の道を歩む共産党内の実権派に反対し、修正主義を消滅するというのが基準であったが、ポスト毛　沢東時代になり、四つの堅持・開放・改革が基準になった。前者の全国２番目の大物の実権派、つまり２番目の大敵が後者では最高責任者である。前者では右派分子であった階級敵が現在は政治局常務委員兼筆頭の副総理である。要するに、共産党の路線・政策・方針或いは指導部が変われば中国国民の人間としての評価も変わるということである。昨日の敵が今日は味方、今日の味方が昨日は敵ということが政治家にだけでなく、中国では一般国民にも有り得るということである。

毛　沢東時代は海外に親戚がいるということは非常にマイナスになることであった。筆者の場合、父方の伯父が台湾、母方の叔父が日本ということで最悪の状態に置かれた。北京大学学生時代、同級生29名の内只筆者一人だけそれが原因して風洞実験室に入れず、その実験の授業の時、外でぶらぶらしていた。又それもあり、当時憧れの的であったソ連留学の申し込みを断念するしかなかった。それがポスト毛　沢東時代になり逆転した。現在は非常にプラスになる。

例えば普通大学生は卒業後5年出国は認めないが、海外に1等親がいれば自由自在、2等親がいれば相当の金額ではあるが、とにかく金を払えば出国出来る。

以上のような変化は単に人間評価の基準が変わったと見るべきではなく、実はここから中国の社会主義体制の体質そのものが変わり始めたと見るべきではなかろうか。なぜかと言うと、基準を変えることにより、人間関係が変わり、階級間の関係も変わって来ているからである。或いはその逆の方がむしろ本質で、階級間の関係が変わったからこそ基準を変えたのではなかろうか。

3．評定と人事調書

人民は国の政治運動、人民自身人生の節目毎に評価される。例えば、右派分子反対闘争の時、どういう立場に立ち、どんな態度を取ったか、プロレタリア文化大革命時代、4人組およびその手先とどういう関係にあったか、何をしたか、天安門広場事件に際し、何かやらなかったか、それから、中卒・高卒・大卒・大学院卒・転勤の時、必ず評定される。

評定の仕方は時と場合によって違うが、大体先ず自分で自己批判をやって始末書なるものを書く。それをみんなの討議にかけ、意見聴取をする。自分の書いた始末書が通らず、書き直しを要求されることもある。普段からお互いよく見ているし、共産党員は本人からの所謂「彙報」という実際は強制的な報告も受けているので、長所・短所・間違い・不足点等様々な意見が出される。それらを纏め、判断して、共産党支部が結論を出し、総支部及び委員会が認め、書記が署名し、その公印を押す。それが中国語で「鑑定」という評定である。言葉は日本語の「評定」という言葉より意味が重く、専門家の宝石・考古学上出土品の鑑定のように権威のある、不動のものである。それを変えることは先ず不可能である。毛　沢東時代はそういった結論を本人に見せなかったので、何が書かれてあるか知る術もなかったが、ポスト毛　沢東時代になってから徐々にそれを本人に見せ、賛成か反対か意見留保か、態度表明出来るようになり、それも書き入れられる。それからは、死ぬまで2度と目にすることはできない。

評定書並びに他の本人に関する資料を全部一纏めにしたものを入れてある袋を「人事調書袋」と言う。この人事調書袋は、「五類分子」を含めた国民全員に一生付いて回るもので、その袋は当然益々厚くなる。入学・就職・転勤・退職、とにかく異動の時、それは所在先の核から異動先への核へ機密書類郵便物として郵送される。この人事調書袋を管理しているのは共産党の組織であり、如何なる責任者であろうと共産党員でない限り、本人は勿論のこと、部下のものさえ見ることは出来ない。民主諸党派と雖も然りである。共産党はこの人事調書袋を握り、組織上人間管理をしている訳である。所謂中国12億国民総背番号である。日本の企業等はよく興信所を使って調査をやっているみたいであるが、中国ではそんなものは必要がないし、権威がない。

近年外資系企業が増えつつあるが、そこで働いている中国人の人事調査袋は普通労働局という官庁役所が管理している。

因に、公務で長期間外国に留学・研修・研究に行った場合は、帰国する際に、在外公館が評定をし、その者の中国所属先の核に送る。とすべきであるが、人数があまりに多く、なかなかそこまで手が届かないというのが現状である。

このような評定は大陸で共産党が政権の座に就いてからの期間しか出来ないのは言うまでもないが、それではその前の国民党政権時代の部分はどうするのかと言うと、核が調べるのである。現所属先に昔からいたとは限らないので、時には遠い地方へ行って苦労して調べざるを得ない場合もある。それを中国語では「外調」と言う。一人一人、一つ一つやるので、非常に手間が掛かる。その執念さには頭が下がる位である。本人は正直に報告しないといけないし、本

人の「歴史」は先ず「清楚」、はっきりとしていないといけない。過ぎ去った昔のことなので、「清白」、汚れがないとまで行かなくても。この本人の「歴史清楚」が核乃至中国で人間として信用される基本条件である。履歴上嘘をついたらいつかは必ず酷い目に会う。筆者の父が1968年に、昔のことを核から調べられ、上海にあった日本の自然科学研究所の嘱託をしている時の或る1日の出来事を「告白」しろと言う。何しろ30年前も昔のことであるだけでなく、数学者なので、政治的なことなどするはずがなく、なかなか思い出せなかった。核からは「態度が誠実でない。思い出せないのではなく、売国的な裏切り行為をやったのであろう」と散々迫られ、自殺までしようとした。辛いことはよく分かるが、母のためだけでも死ぬということは考えず、辛抱して欲しいと息子・娘たちから勧められて思い止まり、3カ月くらいかかってやっと思い出し、核も一応納得してくれたので、父を始め家族全員が助かったことを記憶している。

出国する場合、誰でも核からの「政治審査」を受けなければならない。国立大学の教官が海外へ研究・講義に行く時、学科・学部・大学・国家教育委員会の許可をもらわないといけないのは当然のことであるが、それと並行して核の審査を受ける。そして、教授の場合は核の上部組織、例えば共産党省・市・自治区委員会の許可が必要であったが、近年は手続きが簡素化され、共産党大学委員会の許可だけで済むようになった。審査が通らない時は仮令外国の再三の招聘でもパスポートは発行してもらえない。ところが、本人にはその理由を絶対言わないし、聞くわけにも行かない。筆者が学科の主任教授を受け持っていた時、余計なお世話で、危ないとは思いつつ、同僚のために核に再審査を要求したことがある。その「政治審査」の拠り所とするのがこの人事調査袋である。

外国の企業なり団体等が中国で外国語弁論大会を催し、その1位は海外旅行に短期招待するというような場合、中国側は前以て「政治審査」をやり、出国条件を満たしている者だけを弁論者として出す。外国側が勝手に未審査者の中から選ぶことは許されない。

学会とかの団体は近年その会長・理事長・理事等をメンバーによる選挙で選ぶようになって来ているが、候補者は事前に所属先の核の「政治審査」を受ける。そうすると色々厄介なことが起こりがちなので、通常は所謂団体会員を選び、その人選はその末端組織に任せるのである。学会での知名度がどんなに高くても、核が承認しないかぎり、それ相応の地位には就けない。大学も学部長は選挙制が取れるようになったが、当選しても大学共産党委員会の審査を待ち、通って初めて就任出来る。学長となると、選挙制を取っている大学は今でもないし、相当上部組織の核の審査が必要で、そこが決定する。例えば復旦大学長は中国共産党中央委員会組織部及び国家教育委員会党組が審査し、決定する。その際、人事調書袋を調べるのを決して忘れはしない。

Ⅳ. 思想改造

1．思想改造の目的

四つの堅持の内にマルクス・レーニン主義・毛　沢東思想というイデオロギーを堅持しようというのがあるが、それは憲法にも明記されており、国民には遵守する義務がある。つまり、国民はそれを学び、それで以てブルジョア階級の思想を批判し、プロレタリア階級の世界観・人生観・価値観を持ち、それに準拠して行動するようにならなければならないということである。共産党が人民を階級分析法で分類し、評定・人事調書管理を通してその言論・行為を監視するのも、対象に応じた学習・教育を施し、その思想改造を行うためであると言われているが、それを中国語では「思想・政治工作」と言う。

ところが、肝心のマルクス・レーニン主義・毛　沢東思想の強調されるところが時代によってころころ変わるのである。毛　沢東時代は階級・階級闘争理論が中心であった。それに従ってか、思想・政治工作の主な方式は所謂「政治運動」であり、頭脳労働者を農村や工場の現場に追いやり、強制的に肉体労働に従事させる「下放」であった。ポスト毛　沢東時代になり、それは「左」であって断固として批判し、修正しないといけないと、今度は実践の理論が強調されるようになった。実践こそ真理であるか否かの唯一の基準であり、これこそがマルクス・レーニン主義・毛　沢東思想の真髄である、と。生産性を向上させ、国民生活をレベルアップさせ、富国強兵になるようにならなければマルクス・レーニン主義・毛　沢東思想でも何でもない。それで、開放・改革も、知識分子再評価も、一国二体制も、市場経済も皆マルクス・レーニン主義・毛　沢東思想に準ずるものであるとなった訳である。筆者は直接関係ないが、マルクスやレーニン・毛　沢東を専門とする学者及び思想・政治工作で長年飯を食って来た多くの核の幹部たちは皆戸惑いの色を見せている。要するに、国民に対し、どのように説明し、思想改造を行ったらいいか分からなくなってしまったのである。であるからこそ、それは「右」であるとかと言われたりして、「左」と「右」でいつも揺れ動いているのである。

少々短絡的かも知れないが、この思想改造の思想たるものは、結局は現政権のための、現政権による、現政権の「イデオロギー」であり、目的は国民を納得させ、従わせるためという所にあると言えなくもないであろう。

2．政治学習

時代がどのように変わっても変わらないのが末端組織で行われる政治学習会である。末端組織によって週に半日か2時間、仕事時間内か仕事が終わってからと違うが、必ずメンバーが一堂に集まり、実施される。核の責任者の話しを聞くのが主であるが、中国共産党中央委員会文件や人民日報の社説を巡ってとことんまで話し合い、それを理解しようとする。毛　沢東時代は「毛　沢東選集」と「毛語録」の学習も強いられ、「毛語録」は暗誦出来るまでやらされた。その後期のプロレタリア文化大革命の時など、農民及び一部の労働者を除き、都市部の大半の末端組織は仕事を放り出してまで学習をしたが、朝一番先ず1時間の朝会、「毛語録」の暗誦、午前から午後にかけて文件の学習やら責任者の講演やらで、詰め込まれ、そして、最後に反省会。それがなんと11年も続いたのである。

共産党が好んで利用した方式が自己批判と相互批判である。所謂「古い」思想・文化・風俗・慣習に矛先が向けられ、有形・無形のもの、何から何まで、皆木端微塵に破壊された。読むのは、マルクス・レーニン・毛　沢東の著書、見るのは、「赤いランプの物語」等8本の新劇・京劇、歌うのは、「大海原を渡るには舵取りに頼る」と「私の愛する北京の天安門」の毛沢東の讃美歌、聞くのは、階級・階級闘争のお説教ばかり。頭に残ったのは何々主義という名詞だけであったと言っても決して過言ではない。封建主義・資本主義・帝国主義・修正主義・右翼日和見主義、そして勿論社会主義。正に文化の枯渇・精神の危機に陥ってしまった。

もう一つ飽きなく利用した方式が「憶苦思甜」、昔を思い出せ、苦しかったのではないか、今はどうだ、幸せをよく噛み締め、というやつである。貧農・下層中農・苦力等下層労働者、要するに、第1類にとっては、それは農地を分けてもらったり、資本家の搾取・抑圧下から解放された訳であるから、生活はよくなり、社会的にも国家の主人公になったので、今は確かに幸せそのものに違いないが、第2類、特に第3類にとってはどうであろう。国としては中国は植民地・半植民地から独立国家になったのであるから、誇りというものは感じるであろうが、生活そのものは逆にレベルダウンしたのである。この「憶苦思甜」はそういう人たちにはあまり効かなかったが、昔を知らない若い人たちには教育の効果があったようである。数多くの

「紅衛兵・造反派」のような狂信的な毛　沢東主義者が現れ、プロレタリア文化大革命の主力になった事実がそれを物語っている。

小学校から大学院までの学校教育・社会人向けの成人教育・定年退職者当ての生涯教育等全ての教育の第1位に置かれたのが、政治教育である。中国革命史・中国共産党史・マルクス・レーニン主義基礎・マルクスの政治経済学・哲学は現在でも必修科目であるし、人文・社会科学も唯物論・弁証法に貫かれており、他の立場・視野からの理論・方法は教えられないので、視野が狭くなるのは当然のことである。中国人の儒教知らずは笑い話ではなく、事実である。

年中行事も政治一色になり、政治学習の場に変わってしまった。元旦、年始互礼会、「人民日報」社説の勉強、3月8日、国際婦人デー、5月1日、メーデー、7月1日、中国共産党創立記念日、8月1日、中国人民解放軍創立記念日、これ皆政治的な集会で、9月10日、教師節で、近年インテリが「労働者階級知識分子」になれたお蔭でようやく師の恩を思い出し、10月1日、建国記念日、またもや「人民日報」社説の学習。昔の面影が多少残っているのは旧正月の祝祭日だけで、端午の節句と中秋の名月は休みではない。

政治が全てになり、礼儀作法・言葉遣い・教養・情操等は皆プルジョアのものと決め付けられ、人間は血が通わない、人間味のない動物になってしまった。毛　沢東の話しばかり、朝から晩まで読まされ、聞かされ、話させられ、書かされたので、表現形式の単純化を招き、思考様式の硬直化をもたらした。清末の文学名作「紅楼夢」に出て来るような豊富多彩な表現、正に4千年も続いた中国文化の縮図・エキスと言える言葉が人々の口から取り去られてしまった。老若男女誰でも、外でも内でも、公式の場・プライベートな話し合い、すべて政治・階級闘争だけである。語彙の貧弱と言ったらもう見る影もない。幼稚園の園児も大人、それも政治家のような話し方をし、若い恋人の愛の囁きも、皆政治用語である。流行語も勿論政治関係の言葉ばかりになった。人間関係を潤滑にする敬語が被った被害は計り知れない。人間は敵か味方か、それを先ず確かめ、敵であったらそれは階級的憎しみを込めた言葉を使え、味方であったら所属階級によりそれ相応の表現をしろ。変に遜った言い回しやおべっかを使うような言い方はやめろ。という風潮であったので、美しい敬語はきれいさっぱりなくなり、人間関係は益々ぎこちなくなった。その端的な現れが呼び名である。名前の下に全部「同志」を付けて読んだ。あまり親しくない人は名字に同志を付け、改まった時は名字と名前に同志、親しい人には名字抜き・名前だけに同志、せいぜいそういうふうにしてしか区別できなくなった。自分の年の半分も行っていない新入生から何々同志と呼ばれた老教授はどんな思いであったろう。プロレタリア文化大革命時代は弟子が師匠を呼ぶ時に使う「師父」が「同志」に取って変わった。礼節の邦であった中国の豊富な敬称は海外から見えたお客さんにしか付けないようになった。言語と表裏一体の表情・身振り・物腰も自ずと粗野・乱暴・無礼・下品になったのは言うまでもない。中国人の目はきつい、中国はサービスが悪いとよく言われるが、それにはこの思想改造も原因している、或いはその結果の一つであるまいか。

というと、怡も政治学習を通し、国民は共産党の思う通りになったかの印象を受けるかも知れないが、事実は大半の国民の価値観は変わっておらず、唯それを心の奥深くしまい込み、共産党に合わせ、自分の身を守ろうとしただけである。

その証拠に、ポスト毛　沢東時代に入り、核がたまにほんの少したがを緩める度に「古い」ものがせきを切った水のように出て来た。

政治学習会で核の責任者は相変わらずお説教をやっているが、説得力がなくなり、皆聞こうとしなくなった。一部進んでいる末端組織では廃止さえしてしまった。続けている所でも核の責任者を前にして平気で愚痴をこぼしたり、反対したり、随分大胆な提案をするようになった。

筆者は一度末端組織のグループに分かれての学習会で、「共産党の幹部の給料・活動経費は自分自身の党費で賄うべきで、国民の税金を使うのはおかしいではないか」という意見を出したことがあるが、別に注意も咎められもしなかったし、政治審査もパスして、このように日本に来ている。筆者が所属していた大学の部長のポストに就いているかちかちの共産党の幹部など、筆者に「中国はこのままではだめだ。一党独裁をやめ、二大政党制にしないと問題は解決出来ない」と言ったことがある。正に隔世の感がする。言論の自由は未だ全社会まで、或いは活字にして発表するまで行かないが、少なくとも末端組織内で口で言うだけならもうすでに保証されているのである。アメリカ及び反体制派は少しせっかち過ぎると思う。

3．政治運動

共産党が政権を取ってから、特に毛　沢東時代は次ぎから次ぎと絶え間なく政治運動を繰り広げた。1950年代は、反革命弾圧、米国抵抗・朝鮮援助、農地改革、日本軍国主義復活反対、汚職・浪費・官僚主義等三つの反対、贈賄・脱税・国有資材の横領・仕事及び資材の手抜きごまかし・国家経済情報の盗洩等五つの反対、私営商工業企業改造、農村集団化、胡　風反革命集団反対、梁氏反動的思想批判、映画『武訓伝』と『清宮秘史』批判、右派分子反対、大躍進、人民公社化等の諸政治運動。1960年代は、右翼日和見主義反対、農村社会主義運動、そして、1966年から1976年代にかけて11年も続いたプロレタリア文化大革命。1980年代は、精神汚染反対運動、天安門広場事件。共産党の指導部のメンバーの一人が「毛　沢東は静かにしていられない性格で、2・3年すると又一つ大きな運動を起こす」と言ったことがあるが、当の毛　沢東本人は「中国人は喧嘩が好きである」というのが口癖だったそうで、一生階級闘争の最前線に身を置いた。

政治運動にはそれなりの原因・目的・理由があろうが、その一つに思想改造の要素もあるのは否めない。ただそれは物の見方・考え方をちょっと変えるというような生易しいものではなく、敵側に立つか味方側に立つかという階級的な立場を問われるもので、一つ間違えたら自分だけでなく、家族・親友にも影響するし、それも一時的ではなく、一生である。政治学習と違って、政治運動のやり方は又強制的で乱暴である。優しく丁寧に礼儀正しくなとど言っていられない、どころかむしろそういうやり方は偽善的・プルジョア的と言って撥ね付けられる。正に戦い・闘争そのものなのである。そしてそういう時に限って事の真相が分からないか或いは教えてもらえない。判断のしようがない訳である。中国大陸でそれこそ何10万・何百万或いは何千万人という罪のない人たちが踏み絵を踏み間違え、この世の地獄に陥れられたが、その真相は闇から闇へと永久に葬り去られてしまったと言えよう。

この政治運動史は色々な角度から研究出来ようが、結局は、社会主義とは何か、共産党とは何かということを問うことになるであろう。ここでは、筆者の体験に基づき、末端組織、それも思想改造という角度から諸々の運動の内の三つ、右派分子反対闘争・プロレタリア文化大革命・天安門広場事件を取り上げ、比較しながら簡単に見てみることにする。

1957年、毛　沢東は共産党の指導に対し、何でもいいから意見を出して欲しいと言い出した。それも大いに意見を述べ、大いに議論し合い、大弁論をし、壁新聞を張り出して見解を述べるという所謂「四大」の方法を使っていい、と。人民の第2類・第3類はここぞとばかり意見を出し始めた。各末端組織の壁という壁は見る見る内に壁新聞で埋め尽くされた。鬱憤晴らしではないが、それだけ意見がたまっていたのであろうし、核は又出せ出せと言って群衆を唆した。と同時に、中国共産党中央委員会は各核及び共産党員に、言わせておけ、反論するな、最後に一網打尽にするという秘密の指示を出したと聞いている。それに従い、核は壁新聞を写すなり、写真を撮るなりした。それが後に全部共産党反対・社会主義反対の証拠になったのである。そ

して頃合を見計らって、共産党は「人民日報」で「これはどういうことか」という社説を発表し、全国一斉的な「総反撃」に出たのである。さすがに長年の戦争の経験があるだけあって実に見事であった。

核は先ず末端組織内の群衆の動態を分析し、右・中間・左とに再分類し、特に右は極右と右とに分け、その罪状の整理をした。右に当てられた者、要するに容疑者に「白状」することを強要する一方、他の群衆には壁新聞で容疑者の普段の反動的な言論・行動を摘発すると共に、核に検挙するよう迫った。それからは批判会の連続である。批判と言ってももう罪人扱いで、弁論どころか弁解・言い訳さえ言わせない。唯罪を認め、頭を下げ、許しを請うだけである。筆者は一度、どうも事情が違うようだから、本人にも一言言わせたらどうだと提案して、逆にそれは温情主義だと批判されたことがある。それが後に筆者の右派分子反対闘争時期の結論として人事調書に書き入れられ、現在に至っている。そうして最後の核の上部組織の認可を得て、正式に「判決の言い渡し」、右派分子のレッテルをその者に貼り付ける。当時、北京大学の学生だけで500名以上の右派分子が「誕生」した。

それからは中間・左の群衆に対する思想改造の反省会、一人一人「過関」、チェック・パスしないといけないので、1年もかかった。特に、人間は学問・技術等の実力、所謂「専」だけではだめで、それよりもっと大事なのは「紅」、社会主義体制・共産党に忠誠を尽くすべき思想であるという学習を長々とさせられた。筆者のそれまで歩んで来た道はピンク色の「粉紅色道路」と言われ、批判会に引っ張り出され、散々批判された。

結論として、先ず言えることは、この政治運動を通して、第1類の社会的地位は確認され、労働者・貧農・下層中農及び共産党員・左に属す群衆、要するに人民の大多数の人たちは大いに励まされ、国家の主人公としての自我感覚が掻き立てられ、大躍進へと突き進んで行った。その意味では評価すべきである。次に、共産党は一枚岩で結束しているし、共産党員という人種は特別の材料から出来ていて、確かに立派であるという印象を人民に与えた。共産党の支配が強固なものになった。然し、中国共産党の指導が上昇気流に乗ったのはここまでであり、それ以降は下降の一途を辿るようになる。なぜかと言うと、この政治運動を通じて、第2類・第3類・第4類の人たちは今後どんなに煽てられても絶対に本音を吐き、共産党に意見してはいけない、さもないと危ない、やられるという教訓を汲み取り、二重人格者になってしまったのである。

この共産党に対する不信感が益々高まり、一気に爆発し、それが第1類にまで広がったのがプロレタリア文化大革命である。大革命は「牛鬼蛇神」、即ち妖怪変化と言われる国民の「屑」に対する攻撃から始まったものの、そして、矛先は結局はインテリに向けられたけれども、最初から共産党内部の権力闘争の様相を呈していた。11年の間に、所謂「打倒」した人物は劉　少奇・現在の最高責任者・林　彪・毛　沢東夫人の江　青を始めとする4人組、「打倒」しかけられたのが周　恩来、全部が全部共産党のリーダーである。この権力闘争は中央組織・地方組織から末端組織まで及ぶ全党範囲のもので、核の顔ぶれがくるくる変わるのである。結局、中国大陸全土の核が全部機能しなくなり、無政府状態に陥ってしまった。絶大なる威力のあった中央委員会文件も効かなくなり、中国共産党中央委員会・国務院・中国共産党中央軍事委員会・中国共産党中央文化大革命領導小組の4機関合同で文件を出すようにしたが、核の幹部が群衆に読んで聞かせるということも不可能になったので、町中あちこちに張り出すようになった。それでも、最早それを聞き、守ろうとする者は皆無に近くなった。それどころか、核が真っ二つに分かれたので、群衆も分裂し、派閥の乱闘が始まり、全土は内乱の状態になった。右派分子反対闘争の時期と異なり群衆に対する監視も教育も思想改造も出来なくなった。

相手を倒すには手段を選ばない。共産党の中から実に多くの裏切り者・転向者・スパイが摘発されただけでなく、実力者はほとんど皆資本主義の道を歩んで来た実権派で、マルクス主義者ではない。そして、共産党幹部といい、普通の党員といい、程度の差こそあれ、私利私欲のために職権を乱用したり、地位を利用したりして、少なくともあまり名誉でないことをやって来ているということが青天白日下に暴露された。

それに輪を掛けたのが経済の停滞、生活の悪化である。国民は社会主義体制の優位性に疑問を持ち始め、共産党の威信は地に落ち、徐々に政治・共産党から離れて行った。なにせ多くの工場は操業停止、学校は休講になってしまったので、皆出勤は或る程度するものの、ぶらぶらするだけで、せっせと家事をやり、個人の殻に閉じ籠もるようになった。因に、この時期はベビーブームの時期でもある。

事態を収集するには結局は軍に頼るしかなかった。軍人からなる宣伝隊を各末端組織に派遣し、核の建て直しを図った。但し、その時点では未だ武装はしていなかった。軍だけでは人数が足りないというので、後に労働者から成る宣伝隊も派遣したが、続けて共産党の権力闘争に利用されたのは言うまでもない。秩序は相当回復したが、それは強圧によるものであった。

そこで出て来たのが所謂「下放」である。それまでの秋の取り入れの時の田舎に行って野良仕事の手伝いを２週間位するのと違って、長期である。酷いところは家族ごとで、農村に住み着くのである。北京や上海の高校卒業生は遠い国境の僻地に行かせられた。そして、インテリに農民と同じものを食べ、同じ所に住み、同じ仕事をやるという「三同」を強要した。この徹底した思想改造がどれほど効果を上げたか、後の反体制作家とかがほとんどこの「三同」の経験者であるということだけを見ればすぐ分かるであろう。

結論として、この内乱を通して、中国共産党の組織を核とする中国社会の組織は崩壊した。国民はマルクス・レーニン・毛　沢東思想を信じなくなり、社会主義体勢は問題が多過ぎると思うようになり、共産党も自分の権力や支配の維持に夢中になっている一集団に過ぎないし、共産党員も金銭欲・地位欲・名誉欲を持っている普通の人間であるということが分かった。共産党は軌道の修正・社会の再構築に迫られた。

但し、この時点で共産党に替わって中国という大国を支配し、12億の民を纏めることが出来る勢力は未だ育っていなかった。何千年も続いた封建制の社会、そして続く国民党政権・共産党政権、いずれも中央集権的な専制国家体制である。市民社会には程遠く、大多数の国民には市民意識等ないに等しい。共産党に疑問を持ちながらも、その支配に或る程度慣れ、それに頼るしかないというのが一般国民、特に農民の認識ではなかろうか。これが、もしもプロレタリア文化大革命を思想改造の一環とするならばその思想改造の結果である。改造を迫られたのは国民というよりもむしろ共産党の方であった。

中国共産党はそれに答えようとしたのである。そして、起こったのが1989年の天安門広場事件である。この事件に就いては国内・海外から諸々の報道・論評が出され、賛否両論であるが、筆者は末端組織内にいる者の立場から感じたことを述べるに留める。

先ずこの事件は国民の二つの潮流の衝突の現れと言えよう。一つは急進的、一つは穏健的な流れである。後者は農民を主体とする第１類であり、前者はインテリを先鋒にする第２類と第３類である。これは一部の外国勢力や国内の階級敵の煽動もあったかも知れないが、参加者の圧倒的多数は人民であり、群衆である。北京を始め多くの都市の市民が皆参加者たちに同情し、応援したのは事実である。目的は「開放・改革」の促進である。経済は市場化すべきで、そのためにも政治の民主化を早急に実施しないといけない。社会主義体制の欠陥を克服し、共産党の腐敗的現象を消滅しようということである。勿論その中には、確かに現体制・現政権に見切

りを付け、徹底した改革をと言う人もいたかも知れないが、狙いはやはり国民生活水準の向上及び中国の先進国への前進である。断食という過激な行動を取ったのはその緊迫感の現れである。これが前者である。ところが、農民はどうであろう。農地改革で土地を分けてもらったが、農村集団化・人民公社化でそれが取り上げられてしまった。ポスト毛　沢東時代になり、農家生産・経営請け負い制により、実質的に土地が又自分の手に戻って来た訳である。自由市場も出来、余剰農産物はそこへ持って行って売り出せる。人手が余ったら、「郷鎮企業」へ入り、働ける。やっとこれから重い腰を上げ、自分自身のために稼ごうという矢先に起こったのがこの「騒ぎ」。不安・戸惑い、そして反対するのは当然である。その証拠に農村では何も起こらなかった。軍、軍と言うが、兵士はほとんど農民出身者である。共産党の命令に従い、躊躇しながらも群衆に銃を向けたその心情はよく分かる。この二つの考えの間に意志の疎通がなく、ぶつかってしまった。

次に共産党の対応に問題がある。人民・群衆の要求を正しく理解しようとせず、参加者の「話し合い」にもなかなか応じようとしなかった。すぐ「暴乱」と決めつけた。「これは我々が奪い取った天下だ。やつらに渡してたまるもんか」という発想と発言には賛成しかねる。そして、完全武装した軍を出動し、弾圧に出た。これは共産党の焦りの現れであり、自身喪失と力が弱い証拠である。右派分子反対闘争時は軍は動かなかった。プロレタリア文化大革命時は全然武装していない軍の宣伝隊を派遣した。そして、今度は戦車まで含めた完全武装の軍である。相手は3回とも替わっていない。

第3に、中国の国民は長年に亘り、階級闘争やら内乱やらで疲れ切っているし、生活がなかなかよくならない。国の安定を望んでいるし、落ち着いて国の建設事業に取り組みたがっている。人口が多い上に、多民族と来ている。近代化するにも或る程度の統制・結束が必要であることも分からないでもない。その意味で天安門広場事件が無事治まったことでほっとしてもいる。中国共産党は国民の要求を実現するには自分がイニシアチブを取って、それをやる他に中国には道がないと主張している。果たして中国にとってこの道しかないのであろうか、この道を歩いて行って目標を達成することが出来るのであろうか、というようなことを末端組織にいる人々は考えさせられた。

多くの人たちが事件当時街頭に出られたのも、事件後ごく小人数の「主犯」を除き、参加者追及をしなかったのも、それに当然続くはずである政治学習が姿を消したのも、人間管理が不可能になり、思想改造も効かなくなり、末端組織も拘束力を失ってしまったことを物語っている。

V. おわりに

末端組織は「企業単位」と「事業単位」、即ち生産活動を行い、収入がある末端組織と生産収入がない末端組織との二つに分けられる。村・企業が前者であり、学校・機関・部隊・街道が後者である。両者は共通点があるし、ここまではその共通している所を述べて来た訳であるが、相違点も相当ある。筆者はその相違点に注目し、この10何年一番大きな変動があり、且つ中国大陸を根底から変わらせている企業活動と事業活動に就いても述べるつもりであったが、紙幅が尽きたので、別の機会に譲ることにしたことを先ず御諒承願いたい。

末端組織の特徴と言えば、次ぎの幾つかに絞られよう。

第1に、閉塞性。末端組織間の横の繋がりはほとんどなく、縦の関係だけである。それも実質的には共産党の組織、所謂核を通しての関係である。中国大陸全土に存在するのは共産党の中央・地方から末端に至るまでの各組織であり、中国社会とはそれに付随する国民組織の総和

に過ぎない。それにより、中国の対外的な窓口は自ずと中国共産党中央委員会一つとなり、情報はそこからしか入って来れないし、末端組織独自の要求・意志・行動準則・成長・発展は有り得ない。極めて前近代的な村落的な存在である。

第2に、精神性。労働者階級の思想であるマルクス・レーニン主義・毛　沢東思想を唯一の信条・基準とし、その他のすべての思想・価値観の存在を認めず、排斥する。人間の欲望、特に物質的な欲求を最小限に抑え、人間性を無視する。「人間・人間性・人間愛・人道主義」という言葉さえブルジョア的として抹殺し、使うことさえ許されない。人間は階級の人間としてしか存在出来ない、没個性の低いレベルでの人間疎外である。

第3に、拘束性。非常に徹底した共産党による人間管理、思想改造及び強力な武力で国民は末端組織に閉じ込められており、行動の自由はない。長い間、中国は治安がいい、殺人・強盗・放火は勿論のこと、泥棒・掏摸さえいない等と中国を絶賛する外国人が多かった。ところが、近年は犯罪が激増、治安悪化・無秩序、中国人密輸・密航、日本での不法就労等で、中国批判・中国人嫌悪症が増えつつあり、中国のイメージダウンであるが、それは束縛されていたのが解放されたに過ぎないということを知らない不認識から来るものである。

第4に、消極性。社会主義国には貧富の差がないと言われるが、それは「富」がなく、全員「貧」なので差がないのである。それは国民である限り、最小限の生活は保証されている。衣食住・進学・就職・老後。中国は学費無料で、教育費はかからない。住宅は就職先からもらえるし、本人だけでなく、配偶者が死亡するまで只も同然で住める。定年退職後は年金が出る。日本人はこの三つの費用を捻出するために一生あくせくしている。やはり「鉄飯碗」の社会主義体制もそう悪くはないと言う人がいるし、共産党はこれを利用して「資本主義の悪」を言い、社会主義の優位性を国民に言い続けて来た。ところが、事実は社会主義体制の下では国民の労働意欲・生産意欲は低減し、喪失する。富みを作り出さなくなる。社会主義国が何時まで経っても開発途上国で、先進国になれないその根本的な原因はここにある。

第5に、脆弱性。人間の欲望・人間性を十分に認め、そして自分自身のだけでなく、他人のも尊重するために制約されるという基盤に立っていない組織は生命力がない。中国の末端組織は極めて立ち後れた段階で、戦争・階級闘争時代は功を奏した。それはそれなりに評価すべきであり、中国大陸に社会主義体制が樹立したのにも歴史的必然性がある。但し、その体制に思い切ったメスを入れない限り、要するに、資本主義体制にも優位性があるということを認め、それを導入し、自分自身の改革・改善を図らなければ滅びる。末端組織は昨今の時代には合わず、事ある毎に揺れ動く。既に崩壊しつつある。既得権益層である中国共産党は瀬戸際に面し、背水の陣に臨んでいる。そして、中国国民も十字路に立たされている。

Summary

The society of Modern China is systematized. All the people of China belong to some of smallest units. From a central, local to smallest units, they each have their own nucleus. Those nucleuses are the organization of The Chinese Communist Party.

The nucleus controls the people politically, ideologically and systematically, strengthens the smallest unit by enforcing thought-remolding on the people.

The smallest units are blockade, ideological, restrictive, negative and weakly.

They worked in the first period of the Mao Zedong's era, but they become weakend in the latter period. And from the Post Mao Zedong's era broke down.

The Chinese Communist Party reshuffles the smallest units frantically within the limit of socialistic system, but it is the problem that the Chinese Communist Party is under heavy pressure from the people to restructive thoroughly.